
ずっとそこにいる幽霊

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっとそこにいる幽霊

【Nコード】

N7455I

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

30年前に見たのと同じ場所に同じ姿で立ち続ける少年の霊。死んだ子供時代の友人に招かれるように訪れた父親が求められるものは？ 《霊能力者紅倉美姫シリーズ19》

1、葉書

年賀欠札の葉書が実家から転送されてきた。

「去る十月 夫 田中 浩治が他界いたしました

平成〇〇年十二月

新潟県〇〇〇

田中 律子」

北沢盛夫ははて誰だったかな？と思った。田中姓など探せばいくらでも出てきそうだし、そもそも十二月と記しておきながら今はまだ10月で、亡くなったドタバタの内にプリントして、何かの間違いでうっかりポストに入れてしまったものと見える。

誰か？ ヒントになるのは差出人が新潟県の住所ということだ。現在神奈川在住の盛夫には新潟というと一つ接点がある。小学校の時の2年ほど、父の仕事の関係で住んでいたことがある。しかしそれともう30年も前の話だ。

田中浩治。

その2年、小学3年生と4年生の間に知り合いだった田中さん。まてよと、懐かしい思い出がよみがえってきた。

「田中君。田中こーちゃん・かな？」

何しろ遙か彼方の記憶なので薄ぼんやりだが、確かあの地で仲がよく、よく遊んでいた子が田中こーちゃんだったと思う。

「うん、そうだ、こーちゃんだよ。懐かしいなあ……。そうか、こーちゃんは亡くなったのか……」

盛夫はしんみりしたが、それにしてもなんで引っ越してそれっきりの自分のところに今さら年賀欠札の葉書が送られてきたのか分か

らない。引っ越して、一度年賀状を出したか？ まさかそんな子供の頃の年賀状を見て送ったとも思えない。きっと何か住所だけ残っていて、機械的に作成したものでだろう。

ともかく懐かしくなっていて、インターネットで昔住んでいたところを探してみた。すると近くの湖に大きな公園ができているではないか。地図を眺めるだけでもずいぶん変わったものだ。

公園のホームページを見してみる。サッカースタジアムや野球スタジアムがあって、広くてなかなかよさそうだ。

そうだな、30年ぶりに行ってみるか、と、盛夫は思った。

今度の土曜にでも子供を連れて遊びにと。

2、公園

土曜日。

新幹線に乗って新潟の駅に着くと、これまた駅が記憶と違って戸惑った。しかし公園に行くためのバスを探していると名前を覚えていたバス路線があって、家の近くのバス停の名前もポンと思いつけた。

盛夫は当時家族でマンション住まいをしていた。

しょっちゅう湖に遊びに行っていたからそのバス停に向かえばいいはずだ。

考えていたらちょうどバスが来たので息子と二人で乗り込んだ。

路線は変わっておらず、窓から外を見ていると確かに見覚えがある。建物は変わっても道そのものは変わらないものだ。

30分ほど乗って、記憶にあるバス停で降りた。

降り立つと、ああなるほどなあと考えた。道路のあっち側は新しい建物が建っているが昔ながらの田圃が広がっていて、なんと子供時代のマンションがまだ残っていた。ところがこっち側、湖の方を見るとまったく記憶と違っている。かなり大規模に改造工事が行われたようだ。まったく記憶にない緑の公園が現れている。昔は田圃がこの辺りにもあって、細い曲がりくねった道があって、土とか泥の土地が広がっていたような気がする。今は本当にきれいになっている。

「お父さん、サッカースタジアムはまだあっちみたいだよ」

10歳の息子、俊之^{としゆき}が道路の看板を見て、バスの走っていた先を指さして言った。

「バスの中でちゃんとスポーツ公園入り口って出てたじゃないか」と口をとがらせる。盛夫は懐かしい懐かしいと一人で盛り上がっていたようだ。

「悪い悪い。ま、いいじゃないか。ほら、公園はずうっと続いている」

るんだ、公園に遊びに来たんだから中を歩いていけばいいんだよ。それよりほら、あのマンション、父さんが俊之の年の頃じいちゃんばあちゃんと武生おじさんといっしょにあそこに住んでたんだぞ」俊之はふうんとうでもよさそうに眺めた。父親の昔話なんぞでんで興味ないらしい。

まあまあとなだめて公園に入った。

紅葉が始まったところで、いろいろな種類の木が植えられていて、なかなか楽しめる。子供向けの広場からは歓声が聞こえるし、日本庭園や小さな山水や桜の丘は家族連れでにぎわっている。もつとも息子の年頃の子は少なく、先へ進んで森の道に入ると歩いているのは年寄りが中心で、あとは健康のためウォーキングしているおばさん連中ばかりだった。つまらなそうな息子に盛夫は苦笑した。10歳の子供に自然に親しめと言っても無理だろう。

自然に親しむと言えば、ここが灰色と茶色ばかりだった盛夫の子供時代、田圃の用水路でザリガニ捕りをしたり、魚釣りをしたりしたものだ。その面影を探すと、メインの道と分かれて湖の岸を通る道がある。そちらへ入るとようやく昔の湖の景色がよみがえった。桜の古木が並び、ススキが広く群生している。舗装し直して直してあるのかもしれないが、ここは昔盛夫たちが歩いた道だ。「潟沿いは危険です」「湖での魚釣りは禁止されています」の看板に苦笑した。すっかり公園が整備された今、自然は眺めて楽しむもので、もはや子供たちの遊び場ではなくなっているようだ。

昔の道を歩いて子供時代がだんだんよみがえってきた。

亡くなった田中こーちゃんの顔もはつきり思い出した。大人の今から思えば純朴な楽しい子だった。ザリガニ捕りや魚釣りはこーちゃんに教わったのだ。放課後いっつも二人で真っ暗になるまで遊んでいたっけ。

こーちゃんと遊んだ少年の日々。

思い出しながら歩いていると、ふと、夕日の薄暗がりを思い出した。

なんだろう、

突然胸がドキドキした。

こーちゃんと歩いていて・・・、そう、二人には、誰にも内緒の、秘密があったのだ。

ぶるりと体が心から震えた。

そう、この道だ。

この道を歩いていくと、先に、

とても怖いことがあるのだ。

だから僕たちは、ここいらまで来ると道を曲がってぐると遠回りしていたのだ。

ああ、そうだ、思い出した。

ほら、

見えた。

3、お化けがいた

「おい、俊之」

つまらなそうにしている息子に呼びかけた。

「見ろ。あそこに一本大きな松の木があるだろう？」

そうだ、子供の頃怖くて遠くからしか見られなかった木だ。

こちらの木々の間から、スキの原の向こうに、カーブした道の先に立っている。

「あれが何？」

「おまえ、お化けが怖いんだったよなあ？」

盛夫はニヤニヤ笑って言った。俊之は怒って白けた顔をした。

「いつの話だよ。ガキじゃあるまいし、もうそんなの怖いわけないじゃん」

「へー、そうか。じゃあさ、ちょっとした肝試しをしないか？」

一瞬俊之の顔色が変わった。本当は今も恐がりなのだ。でも今は男のプライドの方が勝る。

「なにすんの？」

「簡単だ、あの木の向こう側を見てくるだけだ」

「見てくるだけ？ それだけ？」

「それだけ」

「なんでそれが肝試しなんだよ？」

「そりゃあな、お化けがいるからさ」

それは、

本当だ。

盛夫たちが子供の頃、あそこにはお化けがいたのだ。

盛夫は立ち止まり、息子に子供の頃の体験を話した。

こーちゃんと一緒に体験した話だ。

いつものように遊んで、そのときは虫を捕まえていたのか、あの木のところに来た。

夕日が、どういう具合か向こうの岸にだけまっ赤に射して、こちら側は半分夜の暗がりに入っていた。

松の木が真っ黒な影になっていた。

盛夫とこーちゃんは何とはなしにそれを見上げた。そこは道の向こうに三角形に湖に突きだし、小さな山に盛り上がっていた。

松の幹の隣りに、男の子が立っていた。

盛夫たちより少し小さいくらい。

なんでそれを変に思ったのか分からない。ただなんとなく、直感的におかしく感じたのだ。

盛夫もこーちゃんもじっと立ち尽くして男の子を見ていた。

男の子は向こう、湖の方を見ている。

変に思った理由を考えれば、それは子供心にもひどく時代遅れな服装のせいだったかもしれない。まるでお父さんお母さんの子供時代の写真で見るような。

じっと見ていると、男の子は、なんだよ？、とでも言うように振り向いた。

薄暗がりの中で、その子は細い、狐のような目をしていた。

なんだかとても怖いと感じた。理由は分からない。

盛夫たちが見ていると、

男の子は体もこちらへ向けた。

真っ黒になった。

顔が見えなくなると、それがまたひどく怖いものに思えた。理由は、分からない。

なんでか、逃げなくちゃ、と思った。でも脚が震えて動けなかった。

ふうっと暗くなって、男の子が大きくなったように見えた。暗がりに影がもやもや広がるみたいに。

逃げなくちゃと思った。

きつと、

ひどく怖い目に遭わされると思った。

暗い。

その時、

犬が吠えた。

野良犬だっただろう、昔はよくいたものだ。

すると、

男の子はぱつと消えた。

見間違いないじゃない、盛夫もこーちゃんもびっくりしたんだから。

お化けだったんだと思った。

湖で溺れ死んだ子供の幽霊だったんだと思った。

盛夫とこーちゃんは走ってマンションまで帰った。

以来それは二人の秘密で、盛夫たちはここを避けて通るようになった。

「そんなの、見間違いに決まってるじゃん」

盛夫が話し終わると俊之は言った。

「だからあ、見間違いじゃないんだってば」

「見間違いだよ。その子は犬が嫌いで、驚いて木の向こうに逃げたんだよ」

「違うってば」

「じゃあさ、その後木の後ろとか調べたの？」

「いや、逃げたから」

「ほおーら、見間違いー。怖いと思ってるからそう見えただけだよー」

「違うってばよー」

どっちが大人で子供か分からない。

4、いた

「じゃあさ、肝試しやろうぜ。怖くないんだろ？」

「怖くねーよ」

俊之は勇んで歩き出し、盛夫も笑いながら歩き出した。

お化けは本当だ。今もそう信じている。しかしそれはもう30年も前の話だ。しかも夕方で、今はまだ2時になるうという時間で、周りの景色もこんなにきれいに変わってしまったている。ゲゲゲの鬼太郎と一緒に、もうお化けの住める環境じゃなくなっている。

子供の頃怖くて二度と近寄れなかったところに行くんだ、楽しいじゃないか。

カーブを曲がって木の全容が現れる。

湖の広い空間を背景に、どっしりと、そうちようど「木」の字を極太の筆で描いたように力強く枝を張り、ふさふさと緑の針の葉を茂らせている。

ああ、その姿は30年前と変わらない。

俊之が先に歩いていく。怖くなんてないやと言わんばかりに早足に。

盛夫は微笑んで年相応ののっしのっしという歩き方で追う。とてもリラックスしている。もはや子供の頃の楽しい思い出。今息子と二人でそれを追体験できるんだから幸せなことじゃないか。

道路はやはりきれいに舗装し直されているようだ。でも木の立つ三角形に盛り上がった土地は変わらない。赤土の斜面に緑の草が生えている。

息子は三角形の底辺にまっすぐ松を見上げる位置で立っている。

盛夫はいたずらな笑顔で近づいていって訊く。

「どうだ、お化けはいたか？」

息子がおずおずと手を上げ、指さした。盛夫は見る。

少年が立っていた。

瞬間、戦慄が突き抜けた。

昼の日の中、少年の姿ははっきり見えた。

赤と白、黄ばんだ白の、綿のジャンパー。えんじ色のてかてかしたズボン。学校で使うような運動靴。

後ろを向いた、坊ちゃん頭。

思わず口が開いた。あり得ないものを見た驚きで、顔面の筋肉が弛緩する。

父親の驚きに息子が蒼白の顔で訴えてくる。

「お父さん・・・」

盛夫は、う、うん、とうなずいて、手を泳がせて息子の手をつかむと、

「い、行こう」

とうわずった声で言って歩き出した。歩いて、後ろを振り向かないように。

十分離れたと思って、そっと振り返った。

向こうを向いた少年はまだ松の幹の隣りに立っていた。

いたんだ、まだそこに・・・・・・

「お父さん、あれ・・・、本当にお化けなの？・・・」

「あ・・・、ああ・・・。あれだ、お父さんが子供の頃見たのは。驚いたなあ、まさかまだ本当にいるなんて思わなかった・・・」

「ねえ、本当にお化けなの？」

「お化け・・・なんだろうなあ・・・」

「怖いよ」

「ああ・・・、怖いなあ・・・」

盛夫は消えないお化けを眺めながら、怖いと言ったが、別の感慨を持っていた。

息子俊之はませた口を利くが体は細く、自然の中わんぱくに遊び回っていた当時の自分に比べるとひ弱く幼い気がする。

あそこに立っている男の子は、年は一つ二つほど下だが、細い息子と同じくらいに見える。

彼はずっとあそこに立っている。まったく変わらない姿で。何を思っであそこでああしているのだろう。

そう思うと、子供の頃とは違う哀れさを感じる。

永遠の子供に、家からの迎えは来ないのだろうか。

10分ほど歩いてスポーツ公園に着いた。サッカースタジアムを中心にグラウンドや広場があるエリアだ。

スタジアムは巨大なホタテ貝のような格好をしていた。

ぐるっと歩くと売店があつて、休憩所でアイスを食べた。

「ねえ、さっきのお化けてさ、幽霊じゃなくて妖怪なんじゃないの？」

「うーん、そうかもな」

「きつとそうだよ、妖怪立ち小僧」

「立ってるだけか？」

「その子に捕まると一緒にずっと立たされるの」

「ははは、そりゃ大変だな。捕まらなくてよかった」

息子も一緒に笑ってアイスを食べた。ショックが和らいで、今は興奮しているようだ。そうだ、子供の自分も怖いのもあったけど、誰も知らない秘密を持っていることが楽しかったのだ。他の子には内緒の秘密基地のようなものだ。

食べ終わって、地元のサッカーチーム関連の展示室を眺めた。

息子が何か見つけた。

「あ、明日、ここで〇〇の試合があるんだ」

ポスターが貼られて、明日息子がひいきにしているサッカーチームの試合があるようだ。明日の午後2時からだ。

ポスターをじっと見ている息子に訊いた。

「見たいか？」

「うん・・・」

「じゃあ、見ていくか？」

「ほんとうっ!？」

パッと顔を輝かせた。

「ちよっと待て」

売店に行って訊くと別の窓口で券を売っているという。いったん外に出て向かうと、息子は期待にドキドキした顔をしてついてきた。窓口で大人と小学生とチケットを購入した。渡すと、俊之は笑みをこぼして嬉しくしょうがないようだった。

「お父さん、ありがとう！」

「うん。お父さんも明日が楽しみだ。じゃあ今夜はこっちに泊まりで、お母さんに電話しとこうな」

携帯電話でホテルを検索すると、すぐ近くに見つかった。降りたバス停から少し戻って、マンションのすぐ近くだ。予約もネットで、部屋が取れた。

「ホテルも取れたぞ」

教えると息子はもう一々嬉しくてニコニコ笑った。こんな子供らしい顔を見るのは何年ぶりだろう。

留守番の妻に電話した。

5, 夢

『ほんとう？　へー、大サービスじゃない？』

「まあな。おまえも来ればよかったな。どうだ、明日来ないか？」

『えー、パス。新幹線代がもったいない。わたしには別にサービスしてよ』

「うわ、そっちの方が高くつきそうじゃないか？」

『えへへー。ね、どう？　俊之は？　喜んだでしょう？』

「ああ・・・」

盛夫は俊之を見下ろしてニコツと笑った。

『それじゃあ男同士楽しんでらっしゃい。こっちも羽を伸ばさせてもっくん』

「もうから』

「え、なに？」

『わたしものんびりさせてもらうわよ』

「いや、今何か言わなかったか？」

『何を？』

「いや、なんか後ろで、子供の声が出たような・・・」

『エー？　俊之が呼んだんじゃない？』

「いや、電話から聞こえたんだ。テレビでもついてる？」

『ううん。今台所。メニュー変更しなくちゃ。外の声じゃない？』

「ああ、そうか。そうだな」

『ね、俊之に代わってよ』

「うん」

電話を息子に渡した。妻と楽しそうに自慢げに話す声。

話の最中に子供の声が聞こえたように思った。

『もっくん』

と言ったように聞こえた。

もつくん。

盛夫がそう呼ばれたのは子供時代の一時期だけだ。

そう、ここに住んでいた2年間だけだ。

薄暗がりの中、こーちゃんの顔が思い浮かんだ。

4時を回ってホテルにチェックインした。

あれから俊之はずっとご機嫌だ。

フロントにどこか食べるところはあるか訊くと幹線道路を10分ほど歩くと食べ物屋が数軒あるという。歩いてばかりで正直辛いが、えいメタボ退治だとタクシーを使うのはやめた。

少し休んで、外を歩き出すと、空気が急激に冷えて水っぽくなった。ああ、この感じ、子供時代によく味わった。夕日に建物がオレンジ色に染まり、そして、薄暗がりへ。

夕食は明日に備えて体力を付けようと焼き肉屋に入った。メタボ退治はまた今度だ。

焼き肉を焼きながら息子は熱心にチームの解説をしてくれた。盛夫はニュースのついでにスポーツ番組をチラッと見るだけで、まともにサッカーの試合なんて見たことはない。だいたい息子がこんな熱心なサッカーファンだったなんて知らなかった。テレビの解説者が言うような専門的なことも言った。

「よし、焼けたぞ！」

息子と二人で食べる焼き肉はうまかった。

ホテルに帰ってシャワーを浴び、興奮気味の息子をなだめて早めに寝た。

ホテルのベッドは落ち着かないなと思っている内に、中年男の肉体の疲れに負けて眠ってしまった。

盛夫は、

白っぽい景色の中を走っていた。空が白く、薄曇りの日のようで、地は茶色く、掘り返された粘土質の土がずうっと広がり、草地の残骸が丸まって崩れている。それを掘り返したブルドーザーが遠くに見える。

木がぽつぽつと立っていて、その向こうがない。

ああ、そうか、ここは湖なんだと思う。

盛夫は走って、

何か建物に入った。

狭い部屋で、ホテルでもなく、何か仮の小屋のようだ。

狭い浴室でシャワーを浴びる。暗い狭い部屋にもうもうと白い湯気が上がる。

体を洗いながら、なんだ俺の体はこんなにブヨブヨしてたっけ？
こりゃ本当にメタボ対策を考えなきゃならないなと思う。

シャワーを終え、濡れた顔を両手で拭う。

湯気に白くなった鏡を拭く。

現れた顔に盛夫はギョツとなる。

誰だ、これは？

まったく見知らぬ顔だった。

頬がたるんで、短髪に刈った頭もかなり薄い。

驚いて自分を見つめる。ぎょろりとした目。

誰だ？

って言うか、俺は誰なんだ？

ここで、何をやってるんだ？

これは、

俺じゃないぞ？

盛夫は目を覚ました。ぐっしり汗をかいている。

隣のベッドから子供の寝息が聞こえる。

夢を見ていた。変な夢だった。なんだろうと考える。

『こーちゃん・・・なのか・・・』

そうだ、ここに来たのはそもそもこーちゃんの死を知ったからだ。夢に見たあの醜い中年男は大人になったこーちゃんの姿だったのか。考えてみるとそういう顔立ちだったような気もするが、それにしてもずいぶん老けた中年になってしまったものだ。

自分は、そんなにいい友達だったのだろうか？

思い出してみると確かに楽しいことばかりだった。その後都会に引っ越してしまい、泥だらけになって遊ぶようなことはなくなってしまった。子供心に田舎っぽい自分を捨て去りたかったかもしれない。ここの生活を思い出すことはなかったように思う。

なんだかこーちゃんに申し訳ないような気がした。

こーちゃんは自分という弟分とでもいうべき友達をずっと覚えてくれていたのか？

自分に会いたくて、会いに来い、と呼び寄せたのだろうか？
会いに行かなくちゃならないかな、と思った。

6、写真

年賀欠札の葉書は持ってきている。

電話をかけると奥さんが出て、お参りさせてもらいたいと言うと快く了解してくれた。

驚いたことにこーちゃんはいや、田中浩治君は、ずうっと同じマンションに住んでいた。盛夫たちが住んでいたマンションと同じ団地に。

朝10時、息子を連れて訪れた。鉄筋コンクリートの建物は変わらなくても、エレベーターはさすがにくたびれている。反応が鈍くて、怖いくらいだ。

ああここだ、とこーちゃんを呼びに来たことのある部屋の前に来た。

呼び鈴を鳴らし、中の声に名を名乗る。ドアが開かれ、奥さんが迎えてくれた。

痩せた、やはり自分の妻より五つ六つ老けた感じの人だった。

まだ白い布に包まれた四角いお骨と、位牌に手を合わせた。

「あの、実はわたし浩治君の子供の頃の友達で、何年も会ってなかったんです。浩治君の、お写真を拝見できませんか？」

ああ、はい、と狭い部屋で、タンスにしまわれていた葬儀の時に使った遺影を出してくれた。

『ああ、やっぱり』

やはり夢の中で見たのは大人になったこーちゃんだったのだ。

それにしてもやっぱり、更に老けている。

「懐かしいなあ」

と盛夫は言った。

「奥様はこちらにおひとりで？」

「ええ。子供もおりませんで、主人の両親もなくなりましたから」

「ああ、そうでしたか。それは、お寂しいですね」

こーちゃんのお父さんは頑固職人といった風体で、お母さんもきつそうな人だったが、友達の盛夫には優しくしてくれた。

大人になっても家族でずうっとここに住んでたのか・・・。

「浩治君は、ご病気で？」

「ええ。脳溢血で救急車で運ばれたんですが、そのまま。お酒の好きでな人でしたから」

「そうでしたか。残念ですね」

改めて写真を見る。怖そうな顔をしている。顔は母親似だったように思うが、表情は父親そっくりかもしれない。

奥さんがクスリと笑った。

「怖い顔でしょう？ 土建業をやっていると、舐められちゃいけない、って、もういつつもこんな顔して、とうとう鬼瓦みたいになっちゃって」

盛夫は曖昧に笑った。たしかに子供の頃の快活で楽しい面影からすっかり様変わりしている。

「建築業をなさってたんですか？」

「そんなにいいもんじゃありません。土木作業の、たかが現場監督です。それだけで終わっちゃいました」

「立派なお仕事でしょう。元気な子でしたからねえ。そのまま大人になったのでしょう」

奥さんは笑って、俊之を見た。リンゴを切って出してくれている。

「子供がおりましたら、わたしも寂しい思いをしないですんだんでしようけれどねえ。あの人、子供はどうしても欲しがらなくて」

「えっ、そうなんですか？」

それは意外だ。大喜びで毎日子供を連れ歩いて一緒に遊ぶいいお父さんになっていただろうと思ったが。

「わたしは欲しかったんですがねえ。何故だったんでしょう？」

とても寂しそうで、悲しそうだった。

話題を変えた。

「実はこちらを伺ったのはこれを受け取ったからなんです」

年賀欠礼の葉書を見せると奥さんはあらとびっくりした。

「あらやだ、これ、送られてきたんですか？」

「ええ、こうして受け取っております」

「あら、いやだわあ」

恐縮する奥さんに盛夫は苦笑した。

「主人のパソコンを調べまして、去年の住所宛に印刷したんですけど、まだ出さずに取ってあるんですけど、まあ、どうして出しちゃったのかしら？」

「やっぱり。」

「きつと何かに紛れて一緒に出しちゃったんでしょうねえ」

「まあ、失礼いたしました」

「いえ、とんでもない。おかげでこうしてお参りに来ることができました。きつと、天国から浩治君が呼んでくれたんでしょう」

「そうなんでしょうかねえ？」

「きつとそうですよ」

辞去するとき、もう一つ訊いた。

「浩治君はその公園の仕事もしてたんでしょうか？」

「ええ、してました。最初の頃から、10年くらい関わってましたよ」

「そうですか。とてもいい公園ですね。びっくりしました」

挨拶して、俊之と二人で部屋を出た。

7、試合観戦

スタジアムに行くと、周辺はすでに地元サッカーチームのカラー、オレンジ色に染められていた。へー、人気があるんだなと感心した。11時から入場が開始されていて、俊之に早く入ろうよとせかされた。おいおいまだ3時間近くあるぞと思ったが、待ちきれないらしく、中にも屋台が見えて、まあいいかと階段を上がった。湖がよく見渡せたが、早く早くというのでひとまず入場した。

入り口を入ると、

広い。

緑のフィールドを2層のすり鉢状の観客席が取り巻いている。

快晴で、芝生が輝いている。

焼きそばとホットドッグを食べ、西の一角に陣取った我がブルーの応援団のお兄さんお姉さんと仲良くおしゃべりして、地元チームのチアリーダーイングを楽しみ、ほぼ満席の観客、練習に選手が現れるとわあっと歓声が盛り上がり、盛夫もすっかり気分が盛り上がってきた。

いよいよプレー開始。

「よーし、行けーっ！」

サッカーが門外漢の盛夫も周りのサポーターと一緒にって声を出し、アウエーの圧倒的不利にもなにくそと一生懸命応援した。

ボールの行方に一喜一憂し、

楽しかった。

サッカーがこんなに面白いものとは知らなかった。

いや、スポーツが、か。

それもテレビで見てもやっぱりつまらないだろう。

目の前で、生で見ているこの興奮こそが面白いのだ。

人間が、目の前で、走り、運動し、蹴る、その躍動に興奮するの

だ。

がんばれ。その声が直接選手に届き、鼓舞する。選手がよしと頑張れば、観客の興奮も加速する。

攻め込む、よし！、

蹴った、

ゴール。

「やったああーっ！」

思わず叫んで万歳した。

自分でも驚く行動だが、

「やったやった」

息子と握手して大喜びし、仲間のサポーターたちと「イエーイーッ！」と叫んでハイタッチする。

自分の中にこんな心の爆発力があるとは知らなかった。

わあっというどよめきの中に自分がいる、その一部となってどよめきを、大歓声を作っている。

我を忘れて興奮する。

ああ、スポーツって楽しいな。

盛夫は生まれて初めての競技場でのスポーツ観戦に子供のように喜んだ。

試合に勝った。

2対1。

最高に気持ちよかった。

「いやあー、面白かったなあ」

興奮さめやらぬ面もちで息子と話す。

「うん。やったね」

息子も顔を上気させ目を輝かせている。同じ顔をしていると思った。

周りに従って出口に向かう。味方サポーターはもちろん大喜びだったが、相手方も悔しがりながらも選手に「がんばれよー」と声をかけ、気持ちよい。立ち去る客席にゴミは一つも残らず、ずいぶんとマナーのいいサポーターだ。敵ながらあっぱれだ。

ここに来て本当によかったと思う。

盛夫はここ数年仕事に必死で、ともに子供の相手をしてやれなかった。仕方ないと思う、同僚がどんどんリストラされて去っていったのだから。給料は減って仕事量ばかり増えていった。必死にならないければ、会社にいられなかったんだ。俺だっけずいぶん悔しい辛い思いをしたんだ。

このところようやく落ち着いて、子供の顔を見たら、知らない顔になっていた。変にひねて、お父さんなんていいよと言うように。

盛夫だって申し訳ないと思ったのだ。

だから、

今日は本当によかったと思う。

俊之が、すっかり自分の子供に戻ってくれた。

感謝、だ。

一斉に動く人波に合わせてゆっくり歩き、俊之に言った。

「また見に行くか？」

「うんっ」

俊之は元気に返事した。

盛夫は笑った。

8、消えた

「お父さん、おしっこ」

「そうか。じゃお父さんも」

出口に向かう流れから外れてトイレに入った。

広いトイレだが、入っている人も多く、空いてる便器を見つけて別々に用を足した。

終わって、見渡しても俊之は見つからず、手を洗って、見渡しても俊之の姿は見つけられなかった。

背伸びして捜し、

「おーい、俊之ー」

と呼びかける。見つからないので外へ出て、

「俊之。おい、俊之」

呼んで捜すが、人は続々流れていき、周辺に息子の姿は見あたらない。

「おい俊之、俊之ー」

だんだんと焦りが出てくる。

「俊之、おおーい」

見つからない。もう一度トイレの中を捜して見つからず、

盛夫は真っ青になった。

はぐれて、迷子になってしまった。

いや待て、落ち着けと自分に言い聞かせる。幼児じゃないんだから、こういうときの対処を考えるはずだ、きっとどこか目に付きやすいところで待っているに違いない。

そう思って捜すが、目に付きそうなところはどこを捜してもいない。

こうなると笑顔のサポーターたちが恨めしくなる。

俊之、俊之、と探し回り、途方に暮れそうになった。

「あの、すみません」

会場のスタッフを見つけて話しかけた。

「息子、10歳の子供とはぐれてしまったんです。どうしましょう？」

「そうですか。お待ちください」

若い男性のスタッフはレシーバーでどこかと連絡を取ってくれた。

「ではこちらへ」

警備室へ案内され、名前や特徴を訊かれた。各スタッフのレシーバーに連絡される。

アナウンスされる。

『横浜からお越しの北沢俊之さん。ご家族がお待ちです、お近くのスタッフにお声掛けください』

しばらく待ち、もう一度アナウンスしてもらったが、連絡はなかった。

観客の姿がまばらになり、まだ見つからない10歳の子供に警備室のスタッフにも緊張が感じられてきた。

俊之、俊之、どこへ行ってしまったんだ？

「お父さん。今スタッフが会場を捜していますが、もしもうしばらくしても見つからない場合警察に連絡したいと思います。よろしいですか？」

「ええ、よろしく、お願いします」

盛夫は用意された椅子に座り、不安に落ち着かなく両手で顔を押しさえた。

ああ、あんなに楽しかったのに、俊之、どうか、無事でいてくれよ……

何故こうなった？

と思った。

何故だ？

そもそも自分はどうしてここに来た？

偶然にしては出来過ぎているじゃないか。

子供のお化け。

不気味な夢。

子供を欲しがらなかったこーちゃん。

俊之。

・・・・・。

「ちょっと心当たりを思い出しました。捜しに行ってみますので息子が見つかったらお願いします」

「はい。しかしもし見つからなかったら、警察へは？」

「こちらから、携帯で電話します。それまで待ってください」

「分かりました。見つかりましたらご連絡ください」

盛夫は警備の番号を入力して警備室を出た。

9、発見

盛夫は走り、息が切れて歩き、また走った。馬鹿げていると思う、自分でもまさかと思う。

理由なんか分からない、でも、

息子俊之はあそこにいるような気がする。

どうして？

理由なんか知りたくない。

無事な姿をこの目で確かめるまでは。

ハアハアゼエゼエ息をつき、まっすぐ見渡せる道まで来た。

一本松が見える。

ハアハア。

盛夫はまっすぐ前を見て、早足で歩き出した。

向こうを向いて、三人の人影が立っている。

一人は松の幹の隣りに。

その下の道に大人と子供の後ろ姿が。

手をつないでいる。

それを見て盛夫の顔に凶暴な怒りが浮き上がった。

「俊之！」

呼ぶと、大人の方が振り向き、子供をこちらに向かせた。

俊之だった。

しかし、表情がない。自分を見ない。

盛夫は大人の、男を見た。

「こーちゃん」

30年ぶりに再会する、それは禿げて、太った、子供時代の友人だった。

「君、死んでんだよな？」

ずいぶん姿がはつきりしてやがる。生きた人間と変わらない。

「もっくん。久しぶりだな」

笑いかけられても、昔の顔とだぶらない。こいつはもう自分の知ってるこーちゃんじゃない。

「どういうつもりだ？ 息子をどうする気だ？」

「君の子ども、俊之君だよね？」

「そうだな、どうするか、君次第かな？」

「俺に何か恨みでもあったのか？」

「恨みなんてないよ。ただ、

君は立派だね、見違えたよ。

俺はただ、羨ましいだけさ」

「妬みで、わざわざ俺を呼び寄せたのか？」

「違う違う。俺は、君に助けてもらいたいんだよ。俺はこうして死にしまったのにさ、まだ許してもらえないんだよ。君にさ、俺の身代わりになって、俺を解放してほしいんだよ」

「分かんねーよ、どういうことだ？」

「俺と君だろう、ここの、二人の秘密だよ」

こーちゃんは顔で後ろを示した。後ろ姿の少年を。

「だから分からないよ。その子が、こーちゃんにどうしたって言うんだ？」

「いいよな、君は。さっさとここを離れて、都会に引っ越して」

こーちゃんの、親しみを示していた目が、冷たく、敵意を示した。

「俺はずっとここから離れられなかった。中学も高校も、卒業して就職もだ。」

俺はね、君が引っ越してから何度かここで彼を見ているんだよ。うーん……。いつの間にか取り憑かれてしまっていたのかな・・。

大人になってからも見た。だってふつうにここにいるんだもんなあ。俺はこの工事もやったからな。

大人になって結婚して、俺は考えちゃったんだよ、この子はきっと、

父親を待っているんだろうって。

湖を船で渡って、父親が迎えに来てくれるのをずうっと待ってるんだよ。

そう思ったら、

なあ？

かわいそうじゃないか？

かわいそうだよなあ？

だからさあ、俺はいつの間にかこの子の父親になっていたんだよ。この子の父親になっちゃったからさあ、他の子を持つことができなくなっちゃったんだよ。

幽霊なんか同情持つもんじゃねえな。死んでからつくづくそう思うぜ。

浮かばれねんだよ、体が重くってさあ。

この子が、父ちゃん、行かないでえーって、放してくれねんだよ。

俺はさ、

嫌なんだよ、もう。自分の子でもねえのによお。

だからさ、

今度はおめえの番だ。

おめえがこの子の父親になってくれよ。

なあ、頼むよ、友だちだろう？」

「冗談じゃない」

盛夫は吐き捨てるように言った。

「何勝手なことやってんだよ。なんでその子がおめえの子なんだよ？ 見ろよ、その子は向こうを向いたままじゃないか？ なんで父

親のおめえの方を見ないんだよ？

逆じゃないのか？

おめえが浮かばれないのは、おめえ自身の問題だろう？ 思い通りにならなかった自分の人生を後悔して、その子のせいにしてるんじゃないか？

やめろよそんな考え。

俺を頼るんならなあ、俺の知ってるこーちゃんはそんなひねくれた負け犬野郎じゃないよ。

なあ、いいじゃないか？ 立派なものだよ、君の仕事は。それこそ死んだ後だってこうして残ってるじゃないか？ 誇りを持てよ。なあ、成仏しろよ。出来るって。絶対に」

こーちゃんはあーあと頭を振った。

「素人が分かってねえな。そんなじゃねんだよ。体が重くってな、苦しいんだよ。自分の気持ちだけじゃどうにもならねんだよ！ 成仏できるんならな、俺はもうなんだって、いいんだよ！

なあ、頼むって、なあ？」

「お断りだ。頼む相手を間違えてるぞ」

「くっそお……。頼んで駄目ならな、じゃあおまえも死んでみろよ！ そうすりゃ俺の苦しみが分かるからよ！ やれ、坊主！」

こーちゃんが握っていた手を放して俊之の背を押した。

10、登場

うつろな顔の俊之は、ポケットから折り畳みナイフを取り出すと、刃を出した。

「と、俊之！ おまえそんなものいつ・・・」

こーちゃんのニヤツとした顔を見てハツとした。

「果物ナイフ。リングか？ おまえ、部屋にいたのか？」

こーちゃんはニヤニヤし、俊之は刃を向けて迫ってきた。

盛夫を見て、立ち止まると、

「うう、」

と苦しみだした。

「俊之、しっかりしろ！」

「うわあっ」

俊之は腕を振って、こーちゃんに切りつけた。

「なにしやがるガキッ！」

こーちゃんは俊之の腕を捕まえようとしたが、ブンブン振る腕は

こーちゃんの手を突き抜けた。

「俊之！ もういい！ もういいぞ！」

盛夫は後ろから息子を捕まえて抱きしめた。

「いいぞ、もういいぞ・・・」

俊之は体のこわばりが解けて、盛夫の腕の中にぐったりもたれ込んだ。

こーちゃんはええーいどうしてくれようかと憎々しげに盛夫たち親子を睨んだ。

盛夫は悲しくなった。

「なあ、君」

後ろの騒ぎをまったく無視して向こうを向いたままの少年に呼びかけた。

「こいつを解放してやってくれよ。こいつをもう苦しめないでやっ

てくれよ。

君も、

もういいかげん成仏したらどうだ？

君の本当のお父さんだってもうとっくに亡くなって、あの世で君を捜しているよ。

ね？ こいつと一緒に、あの世に連れて行ってやってくれよ、頼むよ」

けれど少年は相変わらず向こうを向いたまま。盛夫も、こーちゃんも何か反応するのを期待したが、まったく、振り向こうとしない。こーちゃんがしびれを切らせた。

「こうなったら俺がおまえに乗り移って、おまえを……」

まっ赤な鬼の形相になって盛夫に手を伸ばしてきた。

「よ、よせ、やめろおおおっ」

と、

ワンッ！

と耳をビーンと震わせる大型犬の一声。

ビクッと振り向くと、犬と、飼い主の女が立っていた。

「あのー……」

女は首を傾げながら言った。

犬は真っ黒な洋犬。対照的に飼い主の女は白いロングコートに白い綿帽子をかぶり、それだけ犬とお揃いの真っ黒いサングラスをしていた。

女は遠慮がちに言った。

「通りすがりの者が口出しするものなんですが、あ、

みなさん、

勘違いなさってますよ？」

女はこの状況が分かっているのか、実にのほほんとした口調で言

った。

「あなたに憑いている子供、そちらに立ってらっしゃるお子さんは、別の子供ですよ」

「はあ？とこーちゃんも盛夫も顔をしかめて「？」マークを浮かべた。

「えっとですねえ、」

女、紅倉美姫は言った。

「あなた」

と言うのはこーちゃんを指して、

「幽霊を見たのが彼」

と言うのは松の木の子を指して、

「ただだから、自分に取り憑いたのも当然あの彼だろうと思ったんでしょけれど、それが思い込みの勘違い」

盛夫は驚いて訊いた。

「それじゃあ本当にこーちゃんには子供の幽霊が取り憑いていたんですか？」

盛夫は紅倉美姫を知らない。けれどこの状況を納めてくれそうな彼女に無意識的に頼っていた。

紅倉はうなずく。

「そうですよ。彼、そう言ってたでしょう？」

あなたはこの公園の基礎工事で現場監督なさってたんでしょ？」

その時、

子供がひかれて亡くなった事故を目撃したでしょう？」

こーちゃんは驚いて訊いた。

「じゃあ、その子だったのか？」

「いえ、それも違うんです。

事故は狭い道で運転手がスピードを出し過ぎたためのもので、あなたの工事のせいではありませんでしたが、たまたまその時間近くにて駆けつけた父親の悲しみぶりを見て、あなたはひどく心を痛

め、子供を持つのが怖くなった。あなたは本来とても子供が好きな人でしたからねえ。

それからです、

ここにずーっとたたずんでいる男の子の霊を哀れに思うようになったのは。

ところが、

それまでたびたび見ていた男の子の幽霊を見なくなった。

代わりに身近に子供の雰囲気を感じるようになって、あなたは、ああ、あの男の子が自分のところに来てしまったんだな、と思った。

でも何を悪さするわけでもないので放っておいた。もともと男の子に同情していましたしね。

ところが、

自分が死んでみたら、体が重くて成仏できない。

苦しい。

成仏できないで幽霊になったら、ここでまたあの男の子が見えるようになって、あなたも混乱した。

どうやら彼は決して成仏することなく、父親役の自分もおつき合いで成仏できないらしい。

あなたは困りました。もちろん男の子に話しかけましたが、聞いてもらえませんでした。

幽霊でいるのは苦しい。

誰か自分の代わりになってくれないかと考えて、思い浮かべたのが、

あなたです。

それで頑張ってパソコンに細工して、奥さんに喪中葉書を出させて、あなたを呼び寄せた、

というわけです」

11, 30年

こーちゃんは顔をしかめてうなり、盛夫もえーと考えを整理した。

「えーと、それで、取り憑いているのはあの少年でも、事故で亡くなった少年でもない、と？」

「違います。」

取り憑いている子供は、今もあなたの霊体の中にいるんです。

水子の霊ですね。

えーと、生まれて間もなく亡くなった赤ちゃんや、生まれる前にお母さんのお腹の中で亡くなった子供の霊ですね。

水子の霊にも二種類ありましてね、

一つはその子自身の魂、

一つはその子に生まれ変わるはずだった、死んだ経験のある魂です。

あなたに取り憑いているのは後者の方ですね。

彼も10歳くらいで事故で亡くなっているようです。せっかく生まれ変わるはずだったのに、また生まれる前に死んでしまって、悔しくて成仏できないでさまよっているところに、子供の霊に同情的なあなたが現れた。そこで喜んであなたに取り憑いてしまったのです。

その木の男の子の幽霊が見えなくなったのは、あなたに取り憑いた子供の霊があなたを独占したくて見せなくしていたのです。

でもあなたも死んで幽霊になってしまったので、自分の力で見えるように回復したのです」

「そう・・・なのか？」

幽霊のこーちゃんは幽霊の自分がまだ他の幽霊に取り憑かれていると言われて半信半疑なようだ。まだ納得できかねるように紅倉に訊いた。

「本当に、あの子じゃないのか？」

「お疑いなら、本人に直接聞いたらいかがです？」

「だからそれが出来ればこうして苦労しないわけで・・・」

紅倉が、ん？、と首を傾げ、こーちゃんは男の子を振り返った。

男の子がこちらを向いた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

昔、30年前、夕日の薄暗がりの中でだけれど、二人は男の子の顔を見たのだ。

細い、狐のような目をした顔だった。
が。

振り向いた男の子は、

バケモノの顔をしていた。

真っ白な顔に、口と目だけがあった。

口はただの穴で、

目は、巨大な黒目だけだった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

盛夫もこーちゃんも腰を抜かしそうに驚いた。

しゃべった。

「うるせえんだよお、おまえらあ」

声のような音、だった。耳の穴の奥にこびりつくように、ひどく不快な音だった。

巨大な黒目がすごんで、
男の子はスツと消えた。

盛夫は胸のドキドキが治まらなかった。こーちゃんも同様だった。
紅倉は、ふうー……、とため息をついて言った。

「長く幽霊をやりすぎて、人間であることを忘れちゃったんですね。
彼にももともとはここににいる理由があったのでしよう。でも今は、
それも忘れてしまっただけです。」

今の彼は、ここにいたいからいるだけです。

彼は、ここにるのが好きただけなんです。

人間の同情なんて、今の彼にはまったく的はずれで、
どうでもいいんです、

そんなこと」

そうなのか……、と盛夫は感慨深く思った。

変わらないと思った幽霊にも、やはり30年という年月は決して
短いものではなかったのだ。

人間をやめてしまうほどに……。

紅倉が笑って指さした。

「それ。」

そうね、彼はもう人間じゃなく、言ってみれば、

妖怪ね」

妖怪立ち小僧。

一本松の隣りにただひたすら立っているだけの妖怪。何も悪さは
しないが、怒らせると、怖い。

そうか、この世には、

幽霊も妖怪も、

いるんだ。

「じゃあ……、いいわよね？」

紅倉が男たちに確認した。

「えい！」

魔法少女みたいに指を振ると、ポン、と、こーちゃんの体から白く光る玉が現れた。

これが、取り憑いていた水子の霊。

「はい、君。残念でしがみつきたい気持ちも分かるけど、霊っていうのはね、どんなに気持ちも純粹でも、長くこの世に居続けると、ああいうバケモノになっちゃうのよ？」

あなたも、これで体が楽になったでしょ？」

おお、とこーちゃんは両手をひらひらさせて、すると体がふわりと浮き上がり、おほっ、と喜んだ。

「ほんとだほんとだ。いやあ、ありがてえっ！」

・・・もっくん、すまなかったなあ、ひどいことして」

「いや」

盛夫は笑った。

「君には感謝してるよ。呼んでくれてよかった。ありがとう」

こーちゃんはほっとしたように笑った。昔の面影が分かった。盛夫は手を振った。

「じゃ、元気でね。ってのも変か？」

こーちゃんは笑い、光の玉に手を差し出した。光の玉はこーちゃんの周りをくるくる回り、二人は、仲良く天に消えていった。

盛夫が青い空を見上げていると、

「それじゃ、失礼しましたー」

と、紅倉が頭を下げて犬と一緒に歩き出した。盛夫は慌てて

「ありがとうございます」

と礼を言った。

紅倉が遠ざかると俊之が目を覚ました。不思議そうにその背を眺め、

「あれ、誰？」

と訊いた。

「あれは・・・」

盛夫は答えた。

「たぶん、いい妖怪だ」

スタジアムの警備室に息子が見つかったことを電話した。あちらでも安堵したようだ。十分お礼を言って電話を切った。

遠ざかってから一本松を振り返った。人影はなく、ほっとした。

「また会いたいね？」

と息子が言うので言ってやった。

「いやあ、やっぱりお化けなんて見るもんじゃないようだぞ？ 怒

られないようにそっとしておこうぜ」

それより。

「さあ帰ろう。お母さんが待ってるぞ」

すっかり元に戻った息子と試合のことを話しながら、また次の試合観戦を約束させられた。

盛夫も楽しみだ。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7455i/>

ずっとそこにいる幽霊

2010年10月8日15時58分発行